

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第5回 第2.10節～第2.12.4節

2018年3月1日

小田 勝

「2.10 複合動詞」に、もう一つ節を立てよう。

2.10.2 動詞相当連語(新設)

「目をそばむ」「所を去る」のように句の形で1語の動詞相当として用いられるものがある。これを「動詞相当連語」という。動詞相当連語は、受身形で1語の動詞と同じ振る舞いをし、「持ち主の受身文」 (§4.2.2) を作らない。

(1) 遙かに目をそばめられ奉らむもわづらはしく (源・竹河)

(2) 人に指をさされ給はんずる^{かうのと}頭^{あくみやう}殿の悪名こそ心憂けれ。(保元・金刀比羅本)

◆現代語の「お目にかかる」は動詞相当連語として全体で二格をとるが、古代語では「[貴人の] 御目にとまる」の意である。

・[紀伊守範道ハ] 陪従にて内侍所の御神樂に参りける。それかそれにあらざるかのほどにて、
[崇徳院ノ] 御目にかかるまではなかりけれども (保元・金刀比羅本)

動詞相当連語には、助詞を表示しない「名詞+動詞」型複合動詞を作るものもある ((3) は左右両方とも古典文中に用例が存する)。

(3) 思ひを掛く→思ひかく、心を入る→心入る、心を付く→心つく、心を遣る→心やる、先を追ふ→先追ふ、手を負ふ→手負ふ、所を置く→所置く、床を離る→床離る、額^{ぬか}を突く→額づく、難を付く→難つく

◆「難つく」は内部に「難ヲ付く」という格関係をもつが、語全体でヲ格名詞句をとる。

・人の上を難つけ、おとしめざまのこと言ふ人をば (源・蛭)

61頁「2.11 動詞の連続形式」。「…残る」について、「…ナイデ残る」の意になる場合 (用例(6)～(10)) と、「…タママ残る」の意になる場合 (用例(11)～(14)) とがある、という話。すると、次のような場合、どちらなのだろう (歌題は「菊花纒残」)。

・紫の雲間の星と見ゆるかな移ろひ残る白菊の花 (清輔集)

『清輔集新注』は「色が変わって残っている白菊の花は」とするが、そう決められるだろうか。

同 62 頁の用例(16)～(19)の類例を追加する。

・[空蟬ハ几帳ニ] いたくみ隠れて (=隠レテ座ッテイテ)、袖口ばかりぞ [几帳ト] 色異なるしもなつかしければ (源・初音)

・ひそかに [秘曲ヲ] 尽くし弾きて (=弾キ尽クシテ)、愚老に施し給ふべし。(文机談)

64 頁「2.12.2 ただ+動詞+に+動詞」では、動詞が複合動詞の例をあげる。

・僧の見送るとて岸に立てるに、[舟ハ] たださし出でにさし出でつれば (蜻蛉)

用例(12)では、「景能が膝の節を片手切りに射切りて」(保元)のような表現もある。

66 頁「2.12.4 動詞+し+動詞+ば」で、「同じ動詞を「…し…ば」の形で重ねると」としたが、

・我が宿に植ゑし植ゑつる女郎花秋の野風は当たりしもせじ (元真集)

のような例もあるので、「同じ動詞を「…し…」の形で重ねると」とするべきであったか。「…し…ば」の用例も追加しておく。

・年月を経ても有りし有ればまたもあひ見つ。[経年月ヲ而有シ有レハ亦キ相見ツ] (東大寺諷誦文稿)

同じ動詞を重ねた強調形としては、あげたものの他に次のような句型もある。

・およそ極楽浄土不^{ふたい}退の地をこそ、願ひても願ひ給ふべけれ。(保元・金刀比羅本)

動詞の強調形を作る(動作の程度が大きい意を添える)補助動詞としては、「-かへる」「-くつがへる」「-すぐ」「-そす」「-たつ」「-ちらす」「-ののしる」「-まどふ」などがある。

最後に動詞の章の補足を3点。まず、連載第1回で触れた35頁「2.2.6 活用型の変化」について、次の語例を追加する。①「四段→下二段」に「掠^{かす}む・鍛^{きた}ふ」、②「下二段→四段」に「阻^{はば}む」。

39 頁◆の和歌中の音便例では、次のような例があった。

・尽きもせぬ言の葉ななりと見みながらも頼むと言ふはうれしかりけり(元良親王集)
この「ななり」は撥音便「なんなり」の無表記であるが、和歌ではたいへん珍しいと思う。

動詞の活用表の語幹の表記について。高校生向けの古典文法の副教材16点では、

次の4種の方式がみられる(小田勝 2014b)。

A	き か き く …	<u>(み)</u> み み みる …	文法書数	5 点
B	き か き く …	<u>(見)</u> み み みる …		1 点
C	聞 か き く …	<u>(み)</u> み み みる …		1 点
D	聞 か き く …	<u>(見)</u> み み みる …		9 点

語幹を全て漢字で表示するもの(D)が最も多く、全て平仮名で表示するもの(A)が次ぐ。Bは平仮名表示だが「語幹と語尾の区別がない」場合は括弧に漢字で表示するもの、Cはその逆である(以上の漢字表示にはルビ付きを含む)。どうしてもよいことかもしれないが、教育の現場では或いは統一する必要もあろう。D方式の場合、「漢字部分が必ず語幹である」と生徒に誤解を与える恐れがある(例えば「聞こゆ」の語幹は「聞こ」である)一方で、ACの平仮名方式では「来」「為」「得」などの時に語幹が書きにくいような気もする(本書はA方式である)。なお、助動詞の活用表には語幹を設定しない(例えば「たり」を「た || ら | り | り …」とは書かない)習慣である。やはり「複語尾」的な感覚があるのだろう。

動詞に関する注釈書の誤訳はやはり自動詞・他動詞の訳出の誤りが一番多い。例えば、
・夕されば[私ハ恋ノ炎デ] 螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき(古今 562)
を「光が見えないので、あの人は平然としているのか。」と訳す本があるが(例えば、ちくま学芸文庫)、「(私の恋に燃える) 光を見ないので、あの人は冷淡なのか。」である。「見えない」と「見ない」との差は、想像以上に大きい。

時には、語意の誤りもみられる。例えば、

・朝夕に伝ふ板田の橋なれば桁さへ朽ちてたぢろぎにけり(堀河院百首)
を和歌文学大系に「橋桁さえ朽ちて渡るのをたじろいでしまった」とし、『堀河院百首全釈』も同様の訳を付すが、『日本国語大辞典』をみれば容易にわかるように、現代語と同意の「たじろぐ」は室町末期・近世初頭以降のものであって、この「たぢろぐ」は「傾く・ゆれ動く」の意である。やはり常々、辞書は引きたいものである。

まだ、書き忘れていたことがあるような気もするけれど、これでひとまず「第2章」の補遺稿を終え、次回からは「第3章」に入ろうと思う。書くべき補遺稿は、あと20章分ある。